

## 聖書が「あなた」と呼びかけているのは誰のことですか？ for JW

「…あなた方の間で指導の任に当たっている人たちすべてに、またすべての聖なる者たちにわたしのあいさつを伝えてください。イタリアにいる人々があなた方にあいさつを送っています。」(ヘブライ 13:24)

「あなた方の間で指導の任に当たっている人たち」とはだれですか？  
その人たちの名前を挙げてみてください。

- ① 「知らない」
- ② 「〇〇兄弟と～、△△兄弟」です。

「すべての聖なる者たち」とは、「油注がれたクリスチャン」のことでしょう。  
そして「わたし」とはパウロのことでしょう。  
では「あなた方」とは誰のことですか？  
答えてみてください。

- ① 「二千年前程昔に、ユダヤ地方に住んでいたヘブライ人のクリスチャン」のことです。
- ② 「この部分を読む読者」のことです
- ③ 「私と、他のエホバの証人」のことです」

①番以外を答えた方。あなたは「全てのクリスチャンにパウロの挨拶を伝える」と言う神のことばを実行しましたか？ 未だしていないとすれば、それはなぜですか。  
「イタリアにいる人々」があなたに挨拶を送っています。その人々はあなたの知り合いですか？

1 つ前の聖句です

「…では、兄弟たち、この励ましの言葉をこらえてくれるように勧めます。…わたしたちの兄弟テモテが釈放されたことを知ってください。彼がすぐにでも来れば、わたしは彼と一緒にあなた方に会えることでしょう。」(ヘブライ 13:22 - 23)

「兄弟たち」と呼びかけられているのは誰ですか？  
「あなた方」とは誰のことですか？  
答えてみてください。

- ① 「二千年前程昔に、ユダヤ地方に住んでいたヘブライ人のクリスチャン」のことです。
- ② 「この部分を読む読者」のことです。
- ③ 「私と、他のエホバの証人」のことです」。

①番以外を答えた方。あなたは、このパウロの言葉をこらえましたか。  
パウロとテモテがあなたに会いに来ると言っています。もう彼らに会いましたか？

こらえる必要があったのは、あなたに、至らない点や罪があったことをけん責したからです。

あなたはそれを重く受け止めてこられましたか？

「…そうした罪と闘う点で、あなた方はいまだかつて血に至るまで抵抗したことはありません。」(ヘブライ 12:4)

「…ゆえに、垂れ下がった手と弱ったひざをまっすぐにしなさい。そして、あなた方の足のためにいつもまっすぐな道を作って、なえたところが脱臼したりすることがないように、むしろそこがいやされるようにしなさい。」(ヘブライ 12:12 - 13)

①番以外を答えた方に更なる質問です。

あなたは、本気で罪と闘ったことはない指摘されています。

あなたの手はそうした罪のために垂れ下がり、膝は弱っています、ちゃんと自覚していますか？

A 「何を言ってるんですか、それは一世紀当時にパウロが手紙を書いた時のことで私個人には何の関係もありません。

正解です。あなたは正しく答えました。

ここに引用した聖句は、実は最後から順に示したものです。では、これの前の方に書かれている事柄は、どうですか。

あなた個人に直接関係のある事ですか。それとも、「それは一世紀当時にパウロが手紙を書いた時のこと」に過ぎないでしょうか？

A 「少なくとも、私に直接言われているのものでないことだけは確かです」

その通りです。しかし、聖書に書かれている言葉は、すべて「神のことば」とされ、あなたもそれを認めておられるんですよね。

では、直接、自分に言われた言葉でなくとも、「神」が全人類に当てられた手紙であり、あなたがクリスチャンであるなら、「すべての言葉」は、あなたに直接当てはまるのではないですか。

A ある意味ではそうですが、クリスチャンとして当てはめるべき所と、私個人には関係ない記述もあります。

しかしその「私個人には関係ない記述」も「神の言葉」の一部には違いありませんよね。

では、その「当てはめるべき所」と「自分には関係ない所」はどうやって選別すべきなのでしょう。

例えばこういう例はどうでしょうか。

「あなたは、真のクリスチャンですか？ そうであるなら、神の言葉聖書に、はっきりとこう書かれているのですから、あなたもそのようにすべきです。」

この主張にあなたはどう反応しますか？

「神の言葉聖書に、はっきりとこう書かれています。」までは、その通りとしても、しかし、その後続く言葉は、正当にそう言える場合もあれば、そうとは言えない場合もあるということです。

一例を挙げてみましょう。

「聖書に、こう書かれています。ですからあなたもこうすべきです。」

と言われて、「もちろんです！」と思っているところへ、示されたのが次の聖句だったらどうしますか？

「キリスト・イエスにあってわたしの同労者であるミスカとアクラにわたしのあいさつを伝えてください。

わたしの愛するエパネトによろしく。マリアによろしく。仲間の捕らわれ人であるアンデロニコとユニアスによろしく。主においてわたしの愛するアンフリヤトによろしく。キリストにおいてわたしたちの同労者であるウルバノ、またわたしの愛するスタキスによろしく。キリストにおいて是認された者アペレによろしく。アリストフロの家の者たちによろしく。わたしの同族ヘロデオンによろしく。主にあるナルキソの家の者たちによろしく。主において骨折り働く婦人たちトリファナとトリフォサによろしく。わたしたちの愛する者ペルススによろしく。主において選ばれた者ルフォス、そして彼とわたしとの母によろしく。アスクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマス、また彼らと一緒にいる兄弟たちによろしく。フィロロゴとユリア、ネレオと彼の姉妹、そしてオルンパ、また彼らと一緒にいるすべての聖なる者たちによろしく伝えてください。」(ローマ 16:3 - 15)

さて、あなたは、どうしますか、困ってしまいますか？ それとも「あなた馬鹿でしょ」と言い返したくなりますか。 わたしなら、断然後者です。

敢えて極端な例を出してしまっても恐縮ですが、論議を分かり易くするための方便ですので勘弁して下さい。

つまり、常に、この例のように論議を待たない分かり易いものならいいのですが、ほとんどの場合、全く当然のように、「ように」さえない、当然そのもの、有無を言わさぬ鉄則のように示されるとき、「待って下さい。自分でよく読んで考えて見ます。」と即答するのでしょうか。それとも、自分の意志というものを完全に棄ててしまった人のように「かしこまりました」と間髪を入れずに反応してしまうのでしょうか。

そして、これには、もう一つ別の問題もあります。

次の言葉は、輪をかけて、あなたにはまったく関係ないものだという理由を示しています。

「…聖なる兄弟たち、天の召しにあずかる人たちよ、…」(ヘブライ 3:1)

これから分かるように「ヘブライ人への手紙」は「天の召しにあずかる人たち」に対する手紙です。(実際のところ)ギリシャ語聖書は全て「天の召しにあずかる人たち」を対象にしたものです。

もし、「あなた」が、天の召しにあずかる人ではないと自認しておられるなら、つまりあなたが、

「他の羊の大群衆」の一人であるならあなたは部外者です。  
「ヘスライ人への手紙」は、直接あなたには当てはまりません。

二千年前程昔に、ユダヤ地方に住んでいたヘスライ人のクリスチャンの天への召しにあずかる人に書かれた手紙の内容が、今日まで残され、翻訳されています。  
それで、現代のあなたがそれを読むことができるようになっているということです。

・・・この辺でそろそろ、この記事の趣旨を述べるべき限界かなと思いますので、この辺りから「本題」に入ります。  
ここで述べようとしているのは「聖書の読み方」ということです。

この記事のタイトルを「聖書が『あなた』と呼びかけているのは誰のことですか？」というタイトルにしましたが、本来は、「聖書の正しい読み方」が適切かと思います。

これまでの、記述から、聖書の適切な正しい読み方というものが確かにある。と言う事を改めて再認識されたと思います。

この「聖書の読み方」に関する問題を検討するに当たって、次の聖句は示唆に富んでいると思います。

「…今日この日に、あなたの神エホバは、これらの規定と司法上の定めを履行するよう、あなたに命じておられる。あなたは心をつくし魂をつくしてそれを守り、それを履行しなければならない。」(申命記 26:16 新世界訳)

「規定」と「司法上の定め」はどこがどう違うのかよく分かりません。

「今日、あなたの神、主はあなたに、これらの掟と法を行うように命じられる。あなたは心を尽くし、魂を尽くして、それを忠実に守りなさい。」(新共同訳)

「掟と法」これも同じように違いがよく分かりません。  
こういうときは、原語を尋ねるしかありません。

ヘスライ語の単語を直訳してそのまま並べると以下ようになります。

「日 これ YHWH あなたの神 あなたに命じた に作る事の を その 規定その これら そしてを その条令 そして あなたは見守る そして あなたは作る を 彼ら 中で全て あなたの心 そして 中で全て あなたの生命」

これを、意味の通る文章にするとおおよそこのようになります。

「今日あなた方の神はあなた方に命じられた。エホバの規定と判例をよく見守って心の中でそして命(生活)の中で行いなさい。」

「規定」= ヘ語：コク；「規定、法律、支払うべきもの」英：statutes スタテュートウ

「条令」= ヘ語：ミシュパート；「法令、布告、しきたり、条例、市条例」英：ordinances オーディエンス

分かり易く言えば、規定とはすなわち「律法」のことです。今日の国家で言えば「憲法」を意味します。

そして「定め、条例、法令」とは、律法を適用した布告や判例（裁判例）のことです。条例は、時代や地方によって異なる様々な条例があります。

つまり、申命記26：16が示しているのは、「規定と判例」をよく学び取ってそれを守りなさいということです。

聖書には、創造などに関する歴史的な記述や預言などが含まれますが、もう一つの目的が「規定と判例を示す」というものです。

すなわち、「聖書」は、律法そのものの内容と、それが実生活の中で、どのように施行され、また違反があった場合、どのように適用され、どんな結果が生じたか（つまり判例）を示すものであるということです。

ギリシャ語聖書も基本的に同様です。

キリスト後の時代で言えば、律法に替わるものが「新しいおきて」です。

つまり「互いに愛し合いなさい」。これが、「規定」のすべてです。

そして、「判例」が、使徒たちの手紙などに見られる、裁きの実例や勧告などに相当すると考えられます。

さらに、それらの書簡の中には、これらには該当しない、提案、推奨する言葉なども含まれています。

そう言う意味で、クリスチャンにとって「互いに愛し合いなさい」というおきては、憲法と同じようなもので、「できる限り、そうしようと努力する」というような「努力目標」ではなく、絶対的な命令です。

一方、その他の、命令、奨励などは、時代や状況によって変化しうる「現状に即した実際的な取り決め」と言えるもので、絶対的なものではありません。

ほとんどは「努力目標」の類に入ります。

それで、あなたに対して、ある事柄が聖書から、あるいは聖書的根拠に基づくとして示された場合「正しい聖書の読み方」として、あるいは聖書の言葉を自分に当てはめようとする時、まず、行うべき吟味は「規定」に沿って考えるということです。

次に、判例に沿って考慮されるべきです。

特にそれが、二千年前の判例そのもの、つまり当時のその地域の人々に提案されたり、取り決められたりした事を現代に、そのまま、適用すべきであるという場合、それをどのようにみなすべきかを識別する必要があるということです。

知恵の道として参考にする。原則として参考にする。行動の規範としてその精神を見倣う。など、それに応じた判断が必要になります。

「それは分かるけど、ひとつひとつ、こうだと言ってくれなきゃ、自分で判断が付かないことだっていっぱいあるでしょ。」

確かにごもつともな意見です。

しかし、それは、実はそれこそ「クリスチャン失格」の烙印を自分で自分に押すことになる  
と言うのが聖書の示すところなのだということを悟らなければなりません。

イエスはこう述べておられます。

「…なぜあなた方は、何が義にかなっているかをも自分で判断しないのですか。」(ルカ  
12:57)

パウロはこう勧めます。

「…わたしは、識別力のある人たちに対するように話します。わたしの言うことの意味を自  
分で判断してください。」(コリント第一 10:15)

これらの言葉から、その言葉が語られた状況や内容は、今日の状況とは違いますが、こうし  
た表現の中の「自分で判断する」ということが、当時だけの事ではなく、クリスチャンにとっ  
て基本的な原則と考えられる。と判断できるはずです。

その上で、聖句を自分自身に適用することに関して「自分で判断する」事を放棄する。無理  
だとあきらめる。ことは、その時点でクリスチャン失格と言う事になりかねない重要な基本  
原則だと認めることができます。

「…ですからあなた方は、自分の歩き方をしっかり見守って、それが賢くない者ではなく賢  
い者の歩き方であるようにし、自分のために、よい時を買い取りなさい。今は邪悪な時代だ  
からです。それゆえ、もはや道理をわきまえない者となつてはなりません。むしろ、何がエ  
ホバのご意志であるかを見分けてゆきなさい…」(エフェソス 5:15 - 17)

「何が神のご意志なのか」資格のある人、あるいは団体、組織に「見分けてもらいなさい」  
とは言われていません。「見分ける」責任は「自分」にあるということも理解できます。  
それこそが「賢い者の歩き方」であり、誰でもない「自分」のために、よい時を買い取るこ  
とである。と述べられています。

なぜ自分で「何が神のご意志」かを見分ける必要があるかという「今が邪悪な時代」だけ  
から、と言うのがその理由であると言われています。

西暦 70 年のユダヤ人の体制の終わりが近づいていたその当時が、『「邪悪な時代」だった故  
に』であるなら、なおさら現代は「終わりの日には」惑わす者が多く現れるという預言され  
た状況が最終的に、大規模に見られる可能性があることを考えると、「賢く歩む」ために「自  
分自身で神のご意志を見分ける」ことは、極めて重要な意味を持つと考えるべき理由があり  
ます。

聖書つまり、神の言葉を自分に当てはめるときに、「これでいいんでしょうか？」という判  
断を他の人に仰ぐ。という時点ですでにアウトだということです。

当然のことですが、自分に関する全ての責任は自分にあり、他の人、組織、社会のせいにする  
ことはできません。

一般的な事でもそうであるなら、なおのこと「自分自身の神に対する忠誠」を、他の人、組織などが「それでいいんです」と言う事に「お任せ」している人は、論外ということになります。

ちなみに、二千年前程昔に、ユダヤ地方に住んでいたヘブライ人のクリスチャンの天への召しにあずかる人に書かれた手紙の中には、次のような言葉もあります。

「…互いのことをよく考えて愛とりっぱな業とを鼓舞し合い、ある人々が習慣にしているように、集まり合うことをやめたりせず、むしろ互いに励まし合い、その日が近づくのを見えますますそうしようではありませんか。」(ヘブライ 10:24 - 25)

「集まり合う」ことに関するこうした勧めは、当時においてもこの「ヘブライ人への手紙」にしか見られません。

これは、もしパウロがこの手紙を書き送った時に、彼らにそうした兆候が見られなかったとすれば、こうした表現は、聖書中にはどこにも存在しなかったことを意味します。

もちろん、こうしたことは他の記述にも言えることです。

聖書で扱われている具体的な事象は、偶然その時に起きたことであり、それについての褒め言葉や助言、けん責、説き勧めなどがなされたことが記録されているのです。

つまり実生活と、その中で「規定」がどのように具体的に施行されたかを示す生きた判例になっているということです。

聖書とはそういうものだと言うことを改め認識し、決して「型」や「方式」を定めるための「サンプル」として記されたものではないことを覚えておくべきでしょう。

最後に蛇足ながら、下に引用した聖句は、ことごとく「他人事」に聞こえるかもしれない、「ほかの羊」\*の方に今一度、考えてみるようお勧めしたい事柄です。

\* (「他の羊」は「新しい契約」に関する当事者ではないとする見解の聖書的根拠の是非についてはここでは、敢えて扱わないこととします。)

「…あなた方は、シオンの山、生ける神の都市なる天のエルサレム、幾万ものみ使いたち、すなわちその全体集会、天に登録されている初子たちの会衆、すべてのものの裁き主なる神、完全にされた義人たちの霊的な命、新しい契約の仲介者であるイエス、そして、アベルの血よりさらに勝った仕方で語る振り注ぎの血に近づいたのです。」(ヘブライ 12:22 - 24)

「ほかの羊」は記念式で、表象物にあずからなくても良い？ いいえ、あずかるべきではない。では、「集まり合う事」にも、与るべきではない？ いいえ、是が非でも定期的にあずかるべきです。これ矛盾していますか。矛盾していないとすると、そう言える根拠は何でしょうか。

「ほかの羊」は、新しい契約の当事者でなく部外者です。

記念式は、いわゆる聖書を学ぶための集会とはまったく異なる、キリストとその花嫁なる天のエルサレムを構成する人々との厳粛な契約を思い起こす重要な集いです。

西暦 33 年のニサンの 14 日にイエスと使徒だけが集い合いました。

この時までにはすでに大勢の人がバプテスマを受け、キリストの弟子になっていました。それらの人は皆「油注がれたクリスチャン」です。

しかし、キリストにご自身の「記念の式」に招かれたのは 12 人の使徒だけです。そしてうち一人は直前に追い出されました。

他の油注がれたクリスチャンはなぜ、記念式に招かれなかったのでしょうか。

もし、その時、その部屋に部外者が入ってきたらどういうことになったと思いますか。

「ようこそいらっしゃいました。パンと葡萄酒には与るべきではなく「見守るだけ」ですけど、それでもよろしかったら、どうぞどうぞ。」などと招じ入れられたのでしょうか。

それは、ありえないでしょう。

「ほかの羊」は「キリストの花嫁」ではないので、招待されていないのです。

集いを主催する人や組織からは、招待状が渡されるかも知れませんが、キリストご自身は「部外者」を招待してはられません。

\*\*\* 塔 74 11 / 1 671 ページ 1,900 年の間『世の光』\*\*\*

「今日キリストは、真の「王国の子たち」を刈り入れるとともに、別の仕事、つまり「ほかの羊」の大群衆を集めるわざも行なっておられます。ほかの羊は、天の婚宴に招かれていないので、天の王とはなりません。」

\*\*\* 塔 00 5 / 1 20 ページ エホバの誉れとなる喜ばしい結婚式 \*\*\*

「イエスの真の追随者は、だれでも出席してよいと告げられている披露宴でなければ、招かれていないのに出席して、招待客のために用意された食べ物や飲み物にあずかることはしません。招待されていないのに行こうとする人はこう自問するとよいでしょう。『この結婚の祝宴に出席することは、新婚夫婦に対する愛の欠けた行為ではないだろうか。』

聖書中の様々な記述について、それが自分に当てはまるのか、どのように適用するのが、本来の神の、そしてキリストのご意志や目的に合っているのかを「自分で判断」しなければなりません。

本来の「規定」は「互いに愛し合いなさい」という一言だけであるのに、報告義務を強制される奉仕の務めとか、取り決められている「自発奉仕」とか、有無を言わさぬ「原則の適用」とか、実際には強いられている「自発的な寄付」などの、様々な組織上の「規定」にいつの間にかすり替えられていないか、「自分で判断」する必要があるのではないのでしょうか。